==========

クラン・コラ Cran Coille：ケルト・北欧音楽の森

Editor : hatao　　September 2019　　Issue No.302
ケルトの笛屋さん発行　　http://www.celtnofue.com/

==========

クラン・コラは月に２回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

(1)ティン・ホイッスルを横笛に改造してもらいましたhatao
(2)アイリッシュミュージックのギターfield 洲崎一彦
(3)私とケルト音楽
　ロックギタリスト／音楽プロデューサー平井光一さん前編　　天野朋美
(4)編集後記hatao

※おおしまゆたかさんの連載は、今月お休みします。

【大事なお知らせ】

本メルマガを配信しているサービス「melma」が、2020年1月末を持ってサービスを終了するそうです。以後は「まぐまぐ」で配信を続けてゆきますので、「まぐまぐ」のほうへ登録をお願いします。

こちらから無料で登録できます。お早めにどうぞ。

https://www.mag2.com/m/0000063978.html

■━━━

※仕事が立てこんで大変忙しいので、いつもの「ケルト音楽と古楽」のシリーズを中断して、お店のブログ用に書いた記事をこちらに載せます。

ティン・ホイッスルは指孔の数が6つしかありません。指孔を下から順番に開けてゆくとド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シの7つの音が得られてリコーダーよりも簡単な運指なのですが、半音階を吹くには指孔を半分くらい開いたり、クロス・フィンガリングという特別な運指で吹かなくてはいけません。

それでも伝統音楽を吹いている限りは7つの音で足りるので問題にはなりませんが、ときどき半音がある曲に出会ったり、伝統音楽以外のジャンルを吹く際に半音が必要になることが、しばしばあります。

そんなとき、アイリッシュ・フルートでは半音に対応したキーのついた楽器を使うと便利です。一方で、ティン・ホイッスルではキーがついた楽器はほとんど見かけません。

おそらくティン・ホイッスルの金属の管体にキーを固定することが難しいことと、ティン・ホイッスルを求めるニーズの多くはその安さが理由であり、キーをつけると製作コストが上がりすぎて需要に合わないためだと思われます。

しかし、19世紀にはキーがついた木製のティン・ホイッスルも製作されていました。

ティン・ホイッスルの歴史は正式には19世紀のロバート・クラーク(1840〜1889)からと言われていますが、それは金属製ボディの量産品のことで、イングランドには、それ以前からティン・ホイッスルと同じ運指の木製の縦笛「フラジョレット」がありました。

フラジョレットでは伝統音楽だけではなく、当時の流行曲やクラシック音楽が演奏されていたようです。そのため、当時の音楽に対応できるように多くのキーがついていることがありました。

フラジョレットは簡単な運指であることから、所得の高い市民階級(ジェントルマン)の間で流行し、19世紀には教則本や作品集が作られていました。

それを庶民の手にも届くように量産した点がクラークの功績です。ティン・ホイッスルも、当初はフラジョレットの名前で販売されていました。

この当時、おそらく木製のティン・ホイッスルにキーを付けた楽器が作られていたのでしょう。

アメリカの職人、故ラルフ・スウィートは2000年前後にKilloury Modelとい

う、1個ないし3つのキーがついたアフリカン・ブラックウッド製のティン・ホイッスルを製作していました。これは、アイルランド人が所持していたものをもとに復元したものだそうですが、もともとはいつ・どこで・誰が作ったものか、よくわかっていません。

以下、スウィート氏のホームページを、アーカイブ検索したものを引用します。

引用元：
https://web.archive.org/web/20110526205130/http://www.sweetheartflute.com/killoury.html

These models are named for the late John Killourhy who played at the Irish Music Sessions in Doolin and Lahinch, Co. Clare, and always attended the session during the Willie Clancy Summer School in Miltown Malbay. He had sent me (unannounced) his favorite whistle which he had bought in London in the 1930's, with a molded bakelite head, recorder style windway, and blackwood body (No keys, though, although keyed whistles were available at the time - I have three in my personal collection), His whistle had been stepped on and crushed. I did extensive repairs, and returned it at no charge. He was very grateful, and years later, gave it to me. Eventually, I finally got to meet him in person at the Willie Clancy Festival.

訳文「このモデルはアイルランド・カウンティクレアのドゥーリンやラヒンチのパブでよく演奏していた故ジョン・キロウリー氏の楽器から名付けられた。

彼はミルタウン・マルベイのウィリー・クランシー夏季合宿のセッションにもよく出ていた。彼は突然、私にお気に入りのティン・ホイッスルを送ってきたのだが、それは1930年にロンドンで購入しており、ベークライト（樹脂）のヘッド、リコーダー状のウィンドウェイ、管体はブラックウッドのものだった（キーはなかったが、当時はキーのあるティン・ホイッスルは購入できた。私は自身のコレクションに3本所有している）。

そのティン・ホイッスルは踏まれて壊れてしまった。それで私は無償で修理をしてあげたのだ。とっても喜んでいた。そして数年して、それを私に寄贈してくれた。その後にウィリー・クランシー夏季合宿で、私はやっと彼と面会を果たした。」

このティン・ホイッスルは、スウィート氏が亡くなる直前まで製作されており、日本では通販楽器店アーリーミュージック・プロジェクトが販売していましたが、当時から販売数が少なく簡単に手に入るものではありませんでした。

私は、2015年ころに店の仕入れとして3キーつきティン・ホイッスルを3本購入

しましたが、その後でSweetheart氏は工房をたたみ、永遠に廃盤となりました。

　私の知る限り、今ではこのようなキー付きのティン・ホイッスルを作っている職人はいないものと思われます。

　さて、もう手に入らないと思っていたこのティン・ホイッスルですが、後継者モルノー氏がスウィート氏の倉庫を点検し、偶然に3キー付きティン・ホイッスルを2本発見、私に教えてくれて、購入することとなりました。その経緯についてはこちらの記事をごらんください。

https://celtnofue.com/blog/archives/1975

　このうち1本は私のコレクションに、もう1本はお客様に渡ったのですが、そのお客様がとても気に入ってくださり、これ用にピッコロの頭部管を発注いただきました。

　製作は後継者のモルノー氏に依頼をしました。本来であれば楽器を送って頭部管とボディの寸法の調整をしてもらうのですが、アフリカン・ブラックウッドはいまワシントン条約の保護対象となっており、実物を送って採寸するのは難しいため、おおよその直径を伝えて、製作をしてもらいました。

　そうして待つこと数ヶ月、グレナディロ製の頭部管が届きました。

　ただし、問題がありました。

　ティン・ホイッスルのほうのテノン（頭部管とのつなぎ目）が太くて、ピッコロの頭部管が入らないのです。

　そこで、試しに私の楽器で、調整を試みました。まずはティン・ホイッスルのテノンに巻いている毛糸を取ります。カッターで慎重に取り外し、糊も可能な限り削り取りました。

　その後で、テノンに厚さ1mmのコルクを貼ります。これでピッコロの頭部管が気持ちよく収まる厚みになりました。そうすると、今度はティン・ホイッスルの頭部管がブカブカになってしまいます。

　通常、木管楽器のコルクはボディに貼ってありますが、もとからSweetheart氏やモルノー氏は頭部管の内側に貼る、珍しいスタイルでした。ですので、ティン・ホイッスルのソケットの内側にもコルクを貼って厚みを調整すれば、ティン・ホイッスルとピッコロの両方ともに使える楽器になります。

　お客様には、そのやり方をお伝えして、コルクなど素材とともに頭部管をお送りしました。

なお、ピッコロ・ヘッドですが、こちらのほうがティン・ホイッスルよりも音程の自由が効き、また横構えの持ち方のほうがキーを安定して操作でき、私はとても気に入りました。音色も、とても良かったです。

キーつきピッコロは10万円以上はしますから、お客様にとっても賢明な買い物だったと思います。

大変特殊な加工でしたので、お客様の許可を得て記事にしました。ティン・ホイッスルを横笛にする加工は、設計面で倍音の音程に癖が出てしまったり、完全にうまくいくわけではありませんが、このようなご依頼がありましたら、ご相談ください。

■――――――

今の若い人の世代から考えると、ヘタをすると、お祖父さんお祖母さんの時代から家にはとりあえずギターがあるというような状況ではないでしょうか。

そういうことになると、子供の頃にお祖父さんのギターを触ったのが初めての音楽体験だったという若者もいるかもしれない。つまり、一般的に考えて、ギターを弾く人というのはめちゃくちゃ多いということになりますよね。

が、日本では、ギターでアイルランド音楽の伴奏をするのに成功している例がけっこう少ない！

これです。こんなにもギター人口が多いにもかかわらず、アイルランド音楽においては、確かにその人口もそれほど多くはありませんし、それに成功している人もあまり多くない。何故、そういうことになるのか？

まあ、確かに、アイルランド音楽はメロディ楽器がせえのっで一斉に同じメロディーを奏でるわけです。その昔は伴奏の概念すら無かったという伝説があるぐらいですから、メロディを弾かなければなんとなくアイルランド音楽をやってる気分にはなれない。いや、そういうもんでしょう。そういう鼻息の荒いメロディー楽器の皆さんと一緒になってボロンボロンと伴奏だけやってもだんだん面白く無くなってくるというのも判らないではありません。

が、fieldのように不特定多数のお客様が集まる空間でずっとセッションを続けていると、時折、アイリッシュはやったことないけど、ギター持って来たのでセッションに入っていいですか？というような方が現れることがあります。

そして、だいたいのコードを探って伴奏に入って来られます。初心者の方ではありません。他のジャンルではそれなりの経験を積んでおられる方です。が、ぜんぜん合わない！隣でフィドルを弾いていると、まったく弾けなくなるぐらい合わない！何が合わないのか？リズムが合わないのです。

何故、こういう事が起こるのかずっと気になっていたのですが、今回、ふとした事からなんとなく見えて来たことがあるのです。

アコースティックギターというのは一昔前はフォークギターと呼び習わしたように、歌の伴奏をするという機会が圧倒的に多いものではないかということなのです。これは弾き語りも含めてですね。押尾コータロー氏がヒットしたことでソロギターという分野も盛んになっていますが、まあちょっと専門的な雰囲気が漂ってしまって、ガッツリはまって練習する気のある人しか手を出さないでしょう。と、なると、普通にアコースティックギターを趣味程度に弾くという場合は、やはりコレ圧倒的に歌の伴奏というのが、需要の面でも圧倒的ではないでしょうか。

私は、ここに注目しました。

　では、歌の伴奏とは何か！？

　ちょっと、歌う人の気持ちになってみてください。無伴奏で歌うというのはやはり相当心許ない。音程もはずすかもしれないしリズムもずれるかもしれない。無伴奏で歌うというのはちょっと歌心がある人でもなかなか勇気がいる。

　つまり、歌う人の立場で考えると、何かガイドが欲しくて伴奏を求めるのですね。つまり、歌の伴奏と言うのは歌のガイドなのです。歌の伴奏をするということは、歌う人はあくまで伴奏しているこちらの音をガイドにしているわけですから、向こうから合わせてくれるのと同じ事が起こっています。

　はい。もう判りましたよね。アイルランド音楽のメロディを奏でる人は恐らく自分から伴奏に合わせて行くような事はしませんよね。はっきり言って絶対にと言っていいぐらいしません。

　そこに、歌の伴奏慣れした人がギターを持って入ったらどうなりますか？
　どんなに複雑なコード進行を知っていても、どんなに技術があっても、誰もギターに合わせてメロディを弾いてくれない限り合わなくて当たり前なのですね。自分からメロディ楽器に合わせに行って、なおかつ、いつのまにかメロディ楽器のリズムを奪い取って、結果的にメロディ楽器がギターに合わせざるを得ないという所まで持っていかないとスリリングなアンサンブルになりません。

　時折、メロディをひたすら追いかけるようなギターを弾く人がありますが、あれは、メロディを弾いている方からすると絶えず後ろから襟首をつかまれているようで非常に弾きにくい。メロディが弾きにくいということでは決してそのアンサンブルが成功しているとは言えないでしょう。

　なので、もう、これは、楽器の技術と言うよりは、ある意味、精神力の勝負みたいな所がある世界になってしまいます。

　一般的に良く言われるアイリッシュギターの壁は、あの独自の変則チューニングであるDADGADチューニングということになっているのですが、レギュラーチューニングのままでも決して伴奏できないというものではありません。何ならずっとワンコードでもいいのですから。と、いうか、如何に凝ったコードを繰り出してもリズムが合ってないと混ざって聞こえませんし、それぐらいならワンコードでもいいからちゃんと混ざって聞こえる方が良いに決まっているでしょう。

　そうなのです、ここいらあたりで、前々回の話題だった、自己表現欲の話にかすって来るのですね。遠慮がちに伴奏を入れてもアイリッシュではメロディ陣に跳ね返されるのがオチです。よほど、根性を据えて思いっきりぶち当たらないと話にならないのです（これは単に音が大きいとかそういう話ではありません）。

　と、いうことで、若いアイリッシュギタリストの皆さん！技術や知識よりも根性です！根性！これで、ぶちかましてください！

　と、まあ、今度は精神論を繰り出してしまいましたが、ますます、今時の若者達には敬遠されるかも。（す）

■――――――

　ロードオブダンスを知ったきっかけは、ロサンゼルスのビバリーセンターに買い物に行った時に、ＢＯＳＥのショールームで映像が流れていたのを聴いてＤＶＤを買いました。妖精がティンホイッスルを吹き、ダンスで悪魔との戦いを表現するなどダークな部分や、綺麗な女性が歌う明るいイメージの場面など、ケルトの魅力が明確に表れている作品だと思います。

○洋楽におけるケルト音楽

　――では早速、メジャー音楽界にみられるケルトについて教えてください。洋楽ではいかがでしょうか？

平井：洋楽の中でケルトを感じるミュージシャンは多くいます。

　僕のケルト音楽との出会いでも話しましたが、ジョンレノンやポールマッカートニーをはじめ、世界的に有名なギタリストであるジェフベックの音楽からケルトの雰囲気を感じることが出来ます。ジェフベックはジャズやブルースなど様々なジャンルを演奏できるギタリストと一般的に認識されていますが、ケルトにかなり影響を受けていて、ザ・コアーズのフィドラーであるシャロン・コアーズと共演し「ウーマン・オブ・アイルランド」という曲を演奏しています。

　また、レッド・ツェッペリンはマンドリンを使ってライブをすることもあり、天国への階段が入っている4枚目でよりケルト色が明確になりましたし、ブルース・ロックギタリストのゲイリー・ムーアは、若い時はかなりケルト色が強い音楽を演奏していました。彼は本田美奈子に曲を書くなど日本とも関りがありますね。彼の旋律やコード進行はまさにケルトです。

　日本人の音楽ではルーツが見えないものがほとんどですが洋楽のアーティストは違います。

　例えばマイケル・ジャクソンは小さい頃から歌っているので、Ｒ＆Ｂ以外の物を歌っても、Ｒ＆Ｂの人が歌ったポップスになる。コアーズのように小さい頃からずっと家族で伝統音楽を演奏しているなど、ルーツがケルトの人は他の音楽をやってもケルトになるんです。

　音楽は必ずメッセージや時代背景が色濃く出ます。

　ケルトだけをやると民族音楽になるから、ロックや他の音楽の力を借りて、さらに伝わりやすくしている面もあると思います。Ｕ２はグランジサウンドの中にケルト、ケイトブッシュはアートの中にケルトが 垣間見えます。ケイトブッシュの嵐が丘のコード進行がすごく独特で、Ｃから Ｂ♭に行くなど普通ではいかない流れを行くところがポイントですね。エリック・クラプトンのクリームのホワイトルームでも、ケルトのコードの流れを感じます。

○ロックミュージックの中ではっとさせられるケルトの旋律

――ずばり！ケルト音楽の魅力はどんな所ですか？

平井：ロックギタリストの観点から言うと、単純に「かっこいい」という点です。コード進行、バウロンが刻むリズム、バグパイプのドローンの重低音…特にシンプルなロックの中にケルトの要素が入るとフックになります。それが妖精や神話と相まって強さと癒しが生まれ、不思議なコード進行がとても魅力的に感じるのです。

それに対して、ジャズやフラメンコにはもっと違う面白さがあります。複雑だったり高度だったり、より難しい事をやろうとする技術的な部分、コード分析、瞬時に判断して演奏するインプロビゼーション（即興）を大事にする音楽にはそういう面白さがあります。

ロックはとてもシンプルで思いをまっすぐに伝えるメッセージソングなので、かっこいいと感じることはとても重要な事です。

○魅力の秘密はコード進行とスケール

――なるほど…もう少し詳しく教えてください！

平井：ケルト音楽の独特な魅力はスケールとコード進行の中にあると考えます。ケルト音楽のスケールは、インドのラーガのカマージというスケールと全く同じです。

　昔ケルト民族は地中海など広い地域に住んでいて、シルクロードを通って楽器が伝わったと言われています。シルクロードの始まりは中国なので、もっと掘り下げていくと中国かもしれないですが。

　ドローンはインドのシタールの低音がずっとなっている考え方で、あのスタイルはインドから来ています。イスラムのコーランも、フラメンコも近くて、その音階はラーガから来ているんじゃないかと考えます。日本の雅楽の笙（しょう）という楽器も四度積みの音と言って、すごく似ています。

　ドローンとメロディが一緒に奏でられているのがバグパイプですね。ポイントはセブンスの音にあります。バグパイプの音を出す時、空気を入れる時に一音下から上がっていくのですが、それが独特の音になっています。セブンスはブルースにも多く使われているが、それは明らかに使い方が違っている。

また、ケルトの匂いはコード進行でも見られます。

少し専門的な話になりますが、ＥｍのときにＡｍじゃなくてＡを使うことや、sus４とadd9sがポイントだったり、和音の使い方がドローンから来てるんだと思うんだけど、何かの音が鳴りっぱなしになっていると、しっくりくるコードよりも広がりが出ます。

通常ではあまりないコード進行ですが、楽器の特性の影響によるものだと思います。それがロックのスリーコードやブルースばかり聞いている耳の中で聞くと、とても新鮮でかっこいいと感じるのです。（つづく）

ロックギタリストであり音楽プロデューサーとして活躍する平井光一さんをゲストにお迎えした第三回「私とケルト音楽」。次回も引き続き平井さんをゲストに、日本のメジャー音楽界におけるケルト音楽についてのお話をお届けします。

【Profile】

ゲスト：平井光一（ひらいこういち）
レベッカやRaphaelのプロデュースを手掛ける。PANTA&ＨＡＬ、中村雅俊、岩崎良美、田中裕子等にギタリストとして参加。
http://studio25.jp/index.html

インタビュアー：天野朋美（あまのともみ）
ケルトを愛するシンガーソングライター、ティンホイッスル奏者。令和元年やまなし大使就任。https://twitter.com/tomu_1234

■――――――――――――――(4)編集後記――――――――――――――――■

気持ちのよい気候が続く音楽の秋、いかがおすごしでしょうか。
私はいままたソウルに来て、コンサートや講義をする日々です。こちらの秋はとっても気持ちがよく、市民も外で食べたりおしゃべりに興じたり、楽しげです。皆さまも、よい秋をお過ごしください。

当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、 毎月の連載形式でも結構です。 ご応募に際しては、

・CDレビュー
・日本人演奏家の紹介

・音楽家や職人へのインタビュー
・音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は　info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますのでご利用下さい。

https://celtnofue.com/community/event/

★全国のセッション情報はこちら

https://celtnofue.com/play/session_info.html

★全国の音楽教室情報はこちら

https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html

=-=-=-

詳しくは以下のURLをご確認ください。
http://rd.melma.com/ad?d=U010PRdMF01186qnP0GGHYwib16ar4Ba001d8fdb
…—…—…——…—…—…——…—…—…——…—…—↑ メルマ！PR ↑—…

■今回の記事はいかがでしたか？
　下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます！
　http://melma.com/score_60g186gnU0rGWYVil1Pam42a48dd6096/

□このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら
　http://melma.com/backnumber_98839/
□その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら
　http://melma.com/contents/taikai/